

ここに新内寂成徳昌景信士こと故多田俊夫殿、大正十六年三月二十一日、当八王子は散田町に多田俊光、ミネ夫妻の長子として生を受く。幼時三歳の頃とか、一家居を現在地に移したるものらし。

やがて尋常小学校卒業後、家業なる建具師を志し、父を師となしその道に入るも、世の厳しき学ぶは他人の飯食う他に道なしと、三鷹なる建具師の門叩きたるものとか。丁稚奉公、聞きしにまさる辛苦多き年月すごしたるらし。

時は戦雲暗くこの国を覆い、戦争も末期近く、俊夫殿にも赤紙舞い来たりて出征、陸軍に入隊す。

されど幸いにも内地に配属、多くの若者ら南の島々、硫黄島はたまた沖繩に赴きて、無事復員せるもの極めて少なきを思えば、誠に強運の人といわざるべけんや。

出征前の秘話、生死わからぬ門出なれど、万一生きて復員せし折は是非にも嫁にと、その後、妻となる浩子殿の両親に申し入れたるものらし。その想いあれば、神仏も故人を見捨て給わず命救いたるものなるか。

かくて戦終わる日の来たり復員す。戦後の混乱あるといえども、自宅より西八王子駅が見えしという焼け野原の街並みも、バラックから徐々に復興、本格的な建築にと移りゆき、されば家業、時を得て大いに繁栄す。

やがて昭和二十七年、故人望みたるごと大月に住まえる、たまたまに同姓なる

宮大工多田家より、浩子殿を迎え結婚。のち家に男子三子を挙げしものなり。

かくて家業に励みつつ、幸いなる人生中道を送りけり。その生涯に幾多の仕事なすといえども、いささかの誇りとするは顧客よりの苦情一つだになきことなり。仕事の合間にも顧客の相談など何くれとなく応じ、その技術はもとより人柄もあいまちて、大工棟梁の信頼厚く、茶室、医者の家などと良き仕事に恵まれたるものなり。

また三多摩で腕良きこと一、二を争う建具師あり。浩子夫人曰く、侍とよばれし職人とか、他の業者にては御する能わざりし者なり。かくなる者ら二人もかかえたる、いかに俊夫殿なる人物のふところの深さ、誠に大人と呼ぶに値する親方なり。

常日頃、父君の写真を飾りこれを崇める、あたかも儒者の如くなり。一家一門これを敬いて、その百年の寿を願いつつも、二年ほど前やや体調を崩すことあり。しばしのち現役復帰するといえども、この五月、八十路の声聞くに及びてさすがに四大を乱し、爾来幾度かの入院に老いの身を養いつつあり。

思えばその生涯、父より継ぎたる家業大事と、これに励みてその道を極め、良き後継者をも育成す。かくあれば人徳自ずとそなわり、これを慕うもの一門、同業のみにあらず誠に多し。

愛子等互いに相和せば、即ち和氣それぞれの家を満た。愛孫また祖父を慕い、倣いて木太刀を学ぶ。祖父もこれに忘れて、内孫の成人式を自らの天寿と願うも、定命また改むることなし。

愛孫友樹殿、その身にすがりて旅立ちはばまんとすれども、ある昼下がりに八十を一期として恩愛の家を告げ、北邸の風にゆらゆらめいて黄泉に赴く。愛児愛孫等一門の別れを惜しむ暖かき心に送られての別れなり。正に大往生といわざるべけんや。